

地域と共に成長すること “NPO さわやか津野” =津野町=

清流通信読者の皆様、こんにちは。今回は、四万十川源流域の津野町から、“NPOさわやか津野”の活動についてご紹介します。

“清流と風と歴史に会えるまち”津野町

高知市から四万十川源流点を目指して進む。須崎市で国道197号線に入ると、目の前に、20基の巨大な風車が立ち並び緑の山々が突然現れる。2006年に民間企業が稼働開始した風力発電施設は、津野町を見下ろす山々の景観にとけ込むように、その白い姿を佇ませる。

津野町は、2005年2月に、旧葉山村と旧東津野村が合併し誕生した、現在人口 6000人ほどの山あいの小さな町だ。町面積198km²の約90%が山林で占められ、4.8km²と極めて少ない耕地の大部分は山麓に棚田状に形成されている。

ここには二つの水系があって、一つは旧東津野村を流れる四万十川とその支流北川の四万十川水系、もう一つは、旧葉山村を流れる、かつてニホンカワウソが姿を現したという新莊川水系だ。

その新莊川水系の津野町葉山地区に拠点を置き、地域の人々と共に文化活動をする団体『NPOさわやか津野』（代表：市川二三）を訪ね、お話を伺った。

“NPOさわやか津野”

津野町が合併された翌 2006年に、福祉と文化を活動方針に掲げ、『さわやか津野』はNPO法人としてスタートした。

「NPO法人の場合、収益・目的などについての細かい取り決めがあります。一方、任意団体は助成金を受けにくい点などマイナス面もありますが、自由な活動が出来ると思うのです。だからみんなで話し合っ、もっと気軽に幅広い活動をしたいと、2010年7月に“任意団体”に変更したのです。」

現在、メンバーは運営委員10名を含む全会員25名の組織で、イベントによっては他に協力者が加わる。設立当初は福祉分野にも取り組んでいたが、現在は地域の人と共に文化活動することに重点を置く。

「でも私たちがやっているのは、“文化活動”とかそんな堅苦しいものではなく“地域の楽しみづくり”のお手伝いといったところ。太極拳・洋裁・茶道などの文化教室を開講していて、各メンバーは得意分野があり、それを活かして地域に入って活動しています。例えば、メンバーの岡林路子さんは“百歳体操”の指導資格があるのでその指導、小物作りが得意な高橋優子さんはその分野での指導をしたりとか、そういうふうです。」

また、年間の最大の取組は、2月～3月で開催される“四万十街道ひなまつり”。その他に、町からの委託事業で“新緑ウォーキング”などイベントを企画運営することも多い。

四万十川流域の文化的景観

2009年2月、四万十川流域は国の重要文化的景観に選定された。

申請に向けての調査は 2006年より始まったのだが、津野町では当時 NPO 法人だった『さわやか津野』がその調査に協力をしている。「文化活動を掲げていたNPOだったし、関係機関の皆さんや田中勝幸さんという専門的な調査員のご協力で調査がスムーズに進行したのです。」と、市川さんは当時のことを話してくれた。



桂の茶畑の景観

最初は、文化的なものや地域の歴史については無関心なメンバーも多かった。「私自身も、長く住み続ける故郷に対して、その良さや価値が見いだせなかったのかもしれない。」

また、調査依頼された『さわやか津野』の拠点は、同じ町内にあるとはいえ、調査対象からは遠く離れた町の反対側に位置する。「実は、同じ町にありながら、四万十川流域を詳しく見るため訪れたのはこれが初めてだったのです。それまでは四万十川に足を運ぶこともあまりなかったですから。でも調査で訪れるごとに、やるほどに、地元の人々が協力してくれるようになって、そしてそこから交流も生まれてきた。津野町には自然、歴史、人、文化等、素晴らしいものが沢山残っていると目から鱗の連続でした。この調査がベースにあったからこそ、そのあとに続いた“四万十街道ひなまつり”のイベントがうまく軌道に乗り、これらを通じて旧葉山村と旧東津野村の交流がよりスムーズにいった部分もあると思います。」

四万十街道ひなまつり

2007年から始まった、その“四万十街道ひなまつり”。今春からは、四万十川の上流域から下流域までの5市町に加えて、愛媛県にまたがる広範囲を会場として、2月～3月の間で開催されている。そして津野町にも、このイベントに参加する大小いくつかの団体があるのだが、それぞれに独立していて個性をもつ。それを束ねていくのが、“さわやか津野の役割”ということだ。

「たとえ同じ町であったとしても、文化にはその地域性が色濃く出ると思います。だから、それをお互いが尊重しあって進めることを一番に心掛けています。」

やってみてわかったことだが、おひなさまの展示一つをとってみても、それぞれにやり方が違うのだ。「西エリア(四万十川流域)は、景観までをも取り込んだひなまつりの見せ方をしている。あれは見事としか言いようがないですよ。」そういうところから学ぶことも多い。だから、お互いを尊重し、刺激をしあって、少しずつでもいいから共に進化をしていきたいと願う。

地域と共に成長する組織として

メンバーの想いは、『こういう取組を通じ“地域の自然、歴史、景観、文化、食”を外に向け発信したい』というところまで一致している。「四万十川にはネームバリューがある。でも、それに比して、まだまだあまり知られていない情報が多い。だから、発信の仕方次第ではもっと強いアピールが出来るはず。四万十川流域や津野町自体の良さをもっともっと知ってもらいたい。でも、それらを受け入れる態勢の問題もまだまだあると思います。」課題は多いがそれがあるからこそ、上に向かってチャレンジも出来る。

「私たちは、文化的景観の調査活動や四万十街道ひなまつりをするにあたっての様々な勉強会を通じて、地域に眠る価値に気がつきました。そして同時に、私たちの組織もレベルアップしたと思っているし、より一層、団結力が強まったと感じています。」

「これからですか? これからも、景観を活かした活動を続けていきたいですね。そして、四万十街道ひなまつりも出来るかぎり長く続けたい。この土地の文化や食を、次の世代に繋ぎたいのです。そのためにも、“文化的景観”がもっと地域に深く浸透する必要性を感じます。私たちも、文化的景観の調査に立ち会ったことで、自分たちの暮らす郷土の歴史や文化の奥深さに、やっと気付いたのですから。ずっとそこにいたら、その良さが見えなくなりますからね。この郷土の文化を上手に取り上げ活動していく中で、地域の人みんなにその価値を再認識してもらいたい。そういう活動をこれからも続けていきたいですね。」

この夏、『NPOさわやか津野』の事務局は移転をした。移転先は、代表の市川さんの実家があるすぐそばだという。

「そこには素晴らしい棚田があるのですが、高齢化などで耕作放棄地が増えていて、棚田の荒廃も進んでいます。それを何とかしたいという思いはあるのですが、まだまだ力が足りません。」

「だからこそ、先人が大切に耕してきた棚田などを守り活用する“文化的景観”という制度が、今まで日が当たらなかった場所に、日が当たるその“きっかけ”をつくってくれることになれば、そういうふうになれば、いいわね・・・」

インタビューの最後に、市川さんが何気なくつぶやいたその言葉は、ずっと私の耳に残った。

その言葉こそが、彼らの活動の原動力になっているのではないのか、そんなことを私は考えていた。(取材/記事: 矢野由美子)



早瀬一本橋とおひなさま



早瀬の一本橋



左から:岡林さん、市川さん、高橋さん

